

医療関係者視覚障害リハビリテーション研修会報告

社会福祉法人日本ライトハウス視覚障害リハビリテーションセンター

芝田 裕一

はじめに

医師・看護婦・視能訓練士・MSW等の医療関係者（眼科）の視覚障害リハビリテーションに対する理解の必要性は論をまたない。障害（失明）告知、視覚障害リハビリテーションへの導入等、医療関係者の担う課題は重要である。

1986（昭和61）年11月14日に大阪市身体障害者スポーツセンターにおいて、'86盲人福祉展（主催：盲人福祉展実行委員会・社会福祉法人日本ライトハウス・財団法人大阪府盲人福祉協会・社団法人大阪市盲人福祉協会、後援：大阪府・大阪市・大阪府眼科医会他）が開催され、そのテーマは「医療と福祉の連携をいかに進めるか」であった（盲人福祉展実行委員会、1987）。その中で、医療スタッフによる障害（失明）告知の重要性、医療からリハビリテーション（福祉）へのよりスムーズな流れの必要性が強調された。もちろん、この福祉展だけが契機になったわけではないが、大きなきっかけの一つとはなった。その後、社団法人日本眼科医会でも眼科医向けに「視覚障害者のためにーリハビリテーションマニュアル」（社団法人日本眼科医会、1989）という約20ページの小冊子を発行し、視覚障害リハビリテーションについての理解の普及に努めている。

そこで、医療関係者に視覚障害リハビリテーションに対する理解を深めるため、社団法人日本眼科医会・社会福祉法人日本ライトハウス主催、大阪府眼科医会后援による「医療関係者視覚障害リハビリテーション研修会」が平成2年度より開催された。

1. 研修会要項（第2回・平成3年度のもの）

1) 目的

医療関係者に対し、視覚障害リハビリテーションの基礎的知識について実技（アイマスクによる体験）、及び講義を通して解説する。

- 2) 主催：社団法人日本眼科医会・社会福祉法人日本ライトハウス
- 3) 後援：大阪府眼科医会
- 4) 参加者定員：10名
- 5) 会場：社会福祉法人日本ライトハウス職業・生活訓練センター
- 6) 期間：3日間（11月12日～14日）
- 7) 内容

- ①実技・ディスカッション＝歩行（手引き、屋内歩行）、
コミュニケーション、日常生活動作
- ②講義＝「失明告知とカウンセリング」、「盲導犬による歩行」

2. 参加者

研修会の案内は大阪府下の眼科を併設している総合病院、約100ヶ所と滋賀、京都、兵庫、奈良、和歌山の主な医療機関、約15ヶ所に送付した。第1回・平成2年度も定員10名を上回る参加希望があったが、第2回も参加希望は締め切り前までで定員を7名上回る17名の応募があり、医療機関のニーズの高さがうかがわれた。また、参加者の本研修会へのとりくみも非常に熱心であった。

以下は第2回・平成3年度研修会参加者をその所属医療機関（順不同）で示したものである。参加者は全員女性で、平均年齢は34.1歳であった。なお、（ ）内は職種と所在地である。

- ① 大阪大学医学部附属病院（看護婦　　：大阪）
- ② 大阪医科大学附属病院（看護婦　　：大阪）
- ③ 関西医科大学附属病院（看護婦　　：大阪）
- ④ 大阪市立十三市民病院（視能訓練士：大阪）
- ⑤ 済生会吹田病院（視能訓練士：大阪）
- ⑥ 星ヶ丘厚生年金病院（視能訓練士：大阪）
- ⑦ 河内総合病院（視能訓練士：大阪）
- ⑧ 医真会八尾病院（OMA　　：大阪）
- ⑨ 神戸大学医学部附属病院（視能訓練士：兵庫）

⑩ 天理よろず相談所病院（看護婦：奈良）

3. 医療機関からのアプローチ

視覚障害リハビリテーション機関から医療機関に対する、「視覚障害リハビリテーション」について理解を促すためのアプローチの事例はいくつか報告されているが、本研修会のように医療機関サイドからのアプローチも年々、増加しつつある。

それらには以下のようなものがある。

- 1) 社団法人日本眼科医会による「視覚障害者のためにーリハビリテーションマニュアル」の発行（前述）。
- 2) 医療機関、及びその関連機関の職員や医療関係者の厚生省委託歩行指導員養成講習会（社会福祉法人日本ライトハウス主催）の受講（修了）。以下はその機関名で、（）内は職種と所在地である。
 - ① 総合新川橋病院（歩行指導員：神奈川）
 - ② 名古屋大学医学部附属病院（看護婦：愛知）
 - ③ 聖霊病院（歩行指導員：愛知）
 - ④ 新生学舎（歩行指導員：愛知）
 - ⑤ 静岡医療福祉センター（歩行指導員：静岡）
 - ⑥ 北海道立心身障害者総合相談所（視能訓練士：北海道）
 - ⑦ 三島眼科医院（歩行指導員：長崎）
- 3) 大阪大学医学部附属病院の依頼で当センターのカウンセラーが同病院に月2回程度、患者のカウンセリング、ケースワークのために訪問している。
- 4) 神戸大学医学部では学生（卒業間近）の医局（眼科）入局前に当センターでの研修（約1日）を平成2年度より開始している。
- 5) 国立大阪病院附属視能訓練学院では平成3年度より「視覚障害リハビリテーション」という講座を開設している。
- 6) その他
 - ① 大阪市立大学医学部附属病院等の看護婦が手引きの方法等について不定期的に当センターで研修を実施する。

- ② 医学・医療関係の学会・研究会で「視覚障害リハビリテーション」に関する発表がいくつか報告されている。

おわりに

本研修会は今後、定期的（年1回）に開催する予定であるが、各種のアクセスにより、医療機関と視覚障害リハビリテーション機関の連携をさらに深め、リハビリテーションへの円滑な移行がなされるよう双方が務めなければならないであろう。

引用・参考文献

- 新井宏 1988 病院訪問による視覚障害リハビリテーションの試み. 視覚障害研究, 27, 36 - 47.
- 市川宏他 1990 特集: 視覚障害リハビリテーションの現況と将来. あたらしい眼科, 7, 1099 - 1140.
- 岡山ミサ子他 1989 視覚障害者への看護—援助システムと自己管理の指導— 特集: 透析実施のための看護技術. 臨床透析, 5, 693 - 699.
- 小村妙子 1991 北海道における視覚障害リハビリテーションに関する眼科医の意識—アンケート調査から—. 視覚障害研究, 34, 65 - 75.
- 芝田裕一 1989 医療機関におけるリハビリテーションと歩行訓練. 歩行訓練研究, 4, 20 - 25.
- 社団法人日本眼科医会 1989 視覚障害者のために—リハビリテーションマニュアル—. (日本の眼科 60 : 10号附録)
- 塚本尚 1989 医療機関における視覚障害リハビリテーションの諸問題. 歩行訓練研究, 4, 11 - 14.
- 日比野清 1989 失明告知とカウンセリング. 歩行訓練研究, 4, 3 - 10.
- 星 充・日比野清 1986 網膜症進行例の社会復帰. 特集: 糖尿病の合併症—眼の障害— プラクティス, 3, 434 - 437.
- 盲人福祉展実行委員会 1987 '86 盲人福祉展報告書. 社会福祉法人日本ライトハウス.

注)本論文は第1回視覚障害リハビリテーション研究発表大会で発表したものである。

《インフォメーション1 研究雑誌：1991年10月～1992年4月》

視覚障害者のコミュニケーション(2) (田内雅規) 戸山サンライズ情報
1991年10月号 Pp. 14-17

視覚障害者のコミュニケーション(3) (田内雅規) 戸山サンライズ情報
1991年11月号 Pp. 3-6

コンピュータを使って… Part2 一視覚障害者とコンピュータ<特集>
障害者の福祉 1991年11月号 Pp. 2-22

未熟児網膜症児の発達的变化に関する事例報告(山本利和・対馬貞夫)
羽衣学園短期大学研究紀要 家政科編 第28巻(抜刷) 1992年2月

WBU東アジア太平洋地域総会を振り返って—今後の課題—(岩橋明子)
働く広場 173, 6-11 1992年2月

イギリスにおける視覚障害者のワークショップ<海外レポート>
(目黒輝美) 働く広場 174, 6-11 1992年3月

営団地下鉄南北線に光明を見る—特集・交通機関と問題点(2) (田中徹二)
リハビリテーション 342, 10-13 1992年4月

《インフォメーション2 図書—1》

視覚障害者雇用マニュアル：事務的職業とコンピュータプログラマー雇用のすすめ(文書・情報処理を中心とする職業) 1991年9月刊
労働省職業安定局高齢・障害者対策部障害者雇用対策課/日本障害者雇用促進協会

第34回IBMウェルフェアセミナー報告集：視覚障害の認識とその処遇をめぐって—コミュニティケアのあり方と日本人の障害者観を探る—
1991年11月刊 日本アイ・ビー・エム株式会社

体の不自由な人びとの福祉 '91 1992年2月刊 ¥1500 テクノエイド協会